

特集にあたって

田 中 仁

1990年代以降の“中国”の突出した存在感を否定する人はいないだろう。冷戦構造の崩壊にともなうアメリカを中心とする巨大な文化システムの顕在化は、世界的な労働力や金融・情報の流動化を加速させるとともに、アイデンティティの多元化・断片化を促した。ここに掲載する3論文は、2005年11月5日に開催した特別例会「ワークショップ+シンポジウム：現代“中国”の社会変容と東アジアの新環境」のために提出されたプレペーパーに加筆したものであり、いずれも変容しつつある現代“中国”の実態とそのイメージを東アジアの新環境との関連から検討することによって、日本は“中国”とどう向き合うべきかについての具体的処方方を提示しようとするものである。

江沛「華北における近代交通システムの初歩的形成と都市化の進展：1881-1937」は、20世紀前半期グローバリゼーションのもとでの中国の「現代化」現象を分析する。また馬曉華「20世紀におけるアメリカの“中国体験”：歴史の記憶と挫折のなかの模索」は、米中関係の20世紀前半段階をアメリカの「中国体験」として再構成する。さらに紀宝坤・宮原暁「中国の台頭と日中関係」は、日中関係の20世紀前半期を双方の政治的ナショナリズムの衝突としてとらえる視角からこの「逸脱の50年」を位置づけなおすことによって20世紀後半期の相互関係を展望する。ここで提起された各論点は、東アジアの今日の問題群との関連のなかに日中関係を位置づけなおすという課題として捉えなおされる必要がある。また日本が「中国」とどう向き合うべきかという問題は、21世紀における東アジアの新環境との関連においてしかるべき位置が与えられなければならないであろう。

この「ワークショップ+シンポジウム」は、大阪外国語大学の2005年度学内プロジェクト「現代“中国”の社会変容と東アジアの新環境」の一環として企画された。その概要は、大阪外国語大学・中国文化フォーラムのホームページ (<http://homewww.osaka-gaidai.ac.jp/~c-forum/>) に掲載している。あわせてご参照いただきたい。

(たなか ひとし・大阪外国語大学)